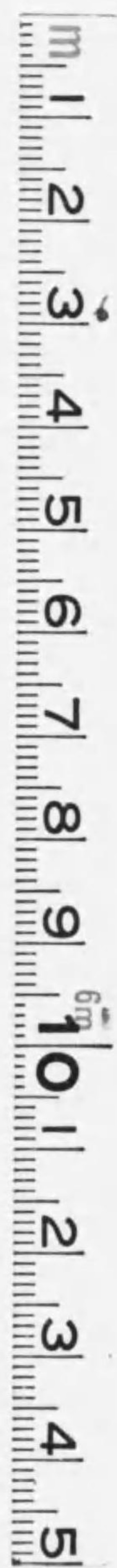


民族の闘争と共存

弘学社
川新著

特251

694



始



694

民族の闘争と共存目次

- 一、太古以來の人類の分布と興亡……………(一)
- 甲 人類の足跡と人種の分類……………(一)
- 乙 人種と民族と其動き……………(三)
- 丙 東洋に於ける民族の盛衰……………(五)
- 丁 歐米に於ける民族の興亡……………(九)
- 戊 民族興亡の理數……………(一四)
- 二、現代民族の共存と闘争……………(一九)
- 甲 民族共存の事實……………(一九)
- 乙 民族對立の現實……………(三三)



丙 各民族の物資力の不平均……………(三六)

丁 各民族自存の方策……………(三〇)

三、民族共存の將來……………(三六)

甲 民族間の秩序……………(三六)

乙 民族防衛の本義……………(四三)

丙 天然資源の獨占と分配……………(四七)

民族の鬭争と共存

一 太古以來の人類の分布と興亡

甲 人類の歴史と人種の種類

人類學上より論ずれば「人類は一元也」と見るのを定説とする、即ち中央亞細亞が人類の發祥地なりと云はれて居る。

人類學の深き遠き研究は、之れを専門家に譲ることとし、有史以來人類分布の實情を見る時には、一元にあらずして多元であるが如くにも思はれ、種々の異なる外形の人類が遠き古來より世界の各地に分布生息してゐる。此等異なる人類に關して、

之れが人種的分類を爲すのに、從來専門學者の説は、種々に分れつゝある十八世紀の末、獨人ブルーメンバッハ (Blumenbach) は、皮膚の色に基き、更に原住地域別を秤準として、五種に分類し、アリヤニ人種、蒙古人種、馬來人種、亞米利加人種、ニーグロ人種となした。

日本の學者 (横山又次郎博士) は、之れに三人種を加へて、人類を八種に分つた。即ち地中海人種、蒙古人種、馬來多島洲人種、亞米利加人種、阿佛利加人種、ドラビダ人種 (印度の南部及ベルチスタンに住す) パプア人種 (比律賓ニューギニヤ、フィジー群島に住す) 濠太刺利亞人種である。

以上は、純學究的研究に依る人種分類方法であるが、其他にも見様は色々ある。

例ば、通俗的分類を試むる人もあつて佛人キュビエ氏は、人類を三種に分ち、白

(2)

人種、黄人種、黒人種としてゐる。更に又白色、黄色、褐色、黒色、赤色の五種に分つ學説もある。此等は、人種の發生地に依らずして、現狀に即して立てたる外形的の區分である。米人ハーワード、及イースト氏の説などは即ち其れである。此分類方法は普通に行はれてゐる。

最近に至つては、政治學社會學等の見地よりして地中海人種を「白色人種」と稱し之れに對する他の四人種を「有色人種」と名付て、對立的に區別して見る説もある而して極端なる説を爲すものに至つては、此の白色有色の二人種の未來の鬭争をさへ論ずるものがあるのである。危険な説である。

(3)

乙 人種レイスと民族ネーションと其動き

同一の人種レイスなりとも、人類は必ずしも親睦しないものである、同一人種の間にかつて

も、利害に因りて抗争は生じ来るものである、人類は各々生きさんが爲めに、集團を爲し、生棲地を異にし、對立して地方地方に別れて生存する、斯くして部落民即ち「民族」の原始團と云ふものが各地に生じ、其れには必ず一人の首長又は數人の統禦者があり上下の區別生じ命令と服従との關係を生じ風俗習慣制度等が必然に生じ來りて、一定地域を占領し、或は不定の地域に據り更に集團して自衛的に生棲することとなり其れが繼續せられる此の原始民族には、遊牧民となれるもあり、又農業民となれるもあつた。同一民族の間にも、終には利害に別れ、各々自己の生存の爲めに、争闘又は離合は自ら生じ來り、時代を経るに従つて、其れが一つの「國」となり更に進歩して、「國民」となり、相對立し、或は又親和し共存し、或は一方に併合せらるゝ事となつた。此の事實に關し、明確なる太古以來よりの正催なる歴史の遺されたるものは見當らぬとしても、進歩せる科學的研究に基きて、後年に至り

(4)

て其の大體は、推斷し得らるゝのである。素より科學に反する迷信は保ち得ない。更に世界の各大陸に付て、人類の存在分布を概言すれば左の如きものである。

丙 東洋に於ける民族の盛衰

遠き古へより、東洋には數國の大國があつた。之を試に西方より眺むれば波斯、印度、支那、日本が其れである。此等の大國には、古來より他の小國に優る文化と武力とを有してゐた。大なる哲學者、大なる宗教家、大なる帝王、大なる政治家も東洋には出た。

(5)

支那建國の初に於ける英明の君主、堯と舜とは東亞に於ける王者としての永遠の模範者であり、東洋の何れの代に於ても、英明なる帝王の理想は、堯舜となるに在つて、忠良なる臣としての願は、「君を堯舜となす」と云ふことに在つた。支

那國は、堯舜の二明君主に依りて、好く統治せられ、偉大なる國民（ネーション）を形成して、四千年の歴史を今日に傳へたのである。

支那國には、古來一盛一衰はあつた、併し乍ら、世界の一大文明國と自稱して傳へられ來り、其の國の政治は、主として孔孟の教を尊重して建てられ來つた。終始蒙古人種の大國として、一貫して儼存し來たのである。此の支那國は、進んで高加索人種即ち白人種の征服を爲せし歴史はある、併し乍ら高加索人種より統馭せられし歴史は無い。此の大國支那を以て、支那人は世界文化の中央と自認し、「中華」と稱し來つた。今日にても其自尊心は存續せられて居り此の國民的自負は、古來高きものがあつた。併し乍ら日清戦争以後支那は衰へ初めた。

今日の支那は、過去の支那が四つの國に分割せられた形である。彼斯の如きは一時は盛大なる帝國を建設し、文化の優れたる當年の歐洲人と戦ひ、歐洲人の征服

(6)

を蒙るに至りし歴史もある。東亞交通要路上の影響であつた。やがて歐洲人は西歐に逐はれた。

一大地方とも云ふべき印度に至りては、二千數百年以上に、釋伽と稱する偉大なる宗教家を出し廣き地方としての優れたる文明を産みたりしも、二百年來英佛等の歐洲人に全域は征服せられ此時以來各地方の王侯は獨立を失つたのである。源因は古來民族の統一と云ふことのなかりしが爲めである。今日のイランは無力である。

(7)

我日本國は、英明なる神武天皇の威武と德澤とに依りて國民統一せられ、鞏固なる帝國を建て、民は泰平を樂しみ來りしも隣邦に帝國主義を以て立てる大元國の興隆せるに際し其野心は我國に向けられ大元國の大兵、十萬餘人の侵畧を蒙りたりし六百年前の偉大にして悲愴なる歴史はある。併し乍ら大元の兵は博多に大敗

して、悉く日本國より驅はれた。又日本は、英雄豊臣秀吉の大略に基き、三百年前朝鮮に侵畧した歴史はある。併し乍ら偉大なる政治家徳川家康の徳川幕府の建設となり、其文化を尊ぶの平和政策に依りて、我國は朝鮮と和し又歐洲人とさへ親和した。

日本は本來大和の國と稱し建國以來、人民の幸福と平和を樂める君子の國と自認し、國初以來久しき年代を經來つた。唯だ、其の間に國の自衛上已むを得ずして三韓其他支那國と戰へる歴史はある、併し乍ら「君子國」たるの確信を以て、日出づる公明正大の民族たるの自信を有し、古來平和に温雅に存在し來つたものである。そうして永遠繁榮の國たるを全民が信じてゐる。

日本人は、古來外國の文化を尊重し來り、排外的偏狹の政策を排斥し、印度の佛敎も又支那の儒敎も大いに之れを日本に攝取して、日本人の固有式文化を建設し

た。日本には徳川家光時代以來キリスト敎を排斥せし歴史はある。其れは當年の危険なる野心を抱藏せる舊敎に屬するジユスイツト派に對して、日本の國の自衛上已むを得ずして、斷行したりし政策に過ぎないのである、日本は古來他の民族他の文明に對して、理由なくて排外主義を行へる如き狭量なる民族ではない。眞に「正道の國」であり君子國であり公明正大を尊ぶ文明的の民族である。此の理念は永遠に保持せらる可きものである。

丁 歐米に於ける民族の興亡

ローマ帝國は史上有名なる十二銅表の國であり、法を重しとしたる文明の國であつたけれども、同時に又侵畧の國であつた。亞弗利加の大國カーセージも英雄ハンニバルを出し同じく侵畧の國であつた。其のカーセージは、終にローマに亡ばされた

ローマは、北方に進出して、英雄ヴェルシニエトリックスを捕虜となし大コールを征服した。更にボスフォラス海峡を越へて、小亞細亞の一帯にも侵略した。而して終には、歐洲北方の森林の中に生息せし比較的野蠻の獨逸民族より亡ぼされた。此の獨逸民族の國は、離合が行はれた。而して大小國の分散が生じた。今日の歐洲諸國は其子孫國である。

和蘭は一時偉大なる力を歐洲に揮ひしも、政治を過り、軍備を怠り、終に海軍國たる英國の下風に立つに至つた。西班牙は、其の海運の力に依りて、世界の各地に領地を有するに至りしも、本國の利益のみを圖りて、植民地の開發に努力せず搾取を事として、終に植民地を多く失つた。葡國も一時は海外に大なる勢力を有せしも、殖民地統治の方針に見る可きものなく、本國よりの移民は土民を同化せずして、反つて土民に同化し、之れが爲めに國としての勢力を失つた。ロシアは英明の主ビ

(10)

ター大帝の時代に遅れて西歐の文化を學び、之れをスラヴ化し、而して強大なる武力を養い着々として四方に侵略した。露西亞の北邊には國と云ふものなく頗る地の利を得てゐた。其の外交は亦巧妙であり、イグナチーフの如き、ムラビエフの如き口舌を以て、巧みに全西伯利を自國に併せ得た外交史上稀に見る巧妙なる外交であつた、又北米大陸のアラスカ迄も露國が侵入した。後米國は露國より之れを買収したのである、スラヴ民族が、他民族同化力の大きなりしことは、洵に驚くべきものがあつた。

(11)

英主偉人を多く出したる文化優秀なる佛國は、他民族同化に於て、世界中最も優秀であつた。奈翁一世は短時間の占領の間に、一時は埃及をも同化した。又奈翁一世は巧妙なる戰術と巧妙なる外交とに依り、歐洲大陸をも着々征服した、併し乍ら遠くモスコウに侵畧し、其の爲めに大敗し其雄圖は破滅した、限度を忘れたる侵畧の

過失である。久しく英佛の下風に居りたりし獨逸は、偉人ビスマルクの賢明なる政策に依りて、同一の獨逸民族の一大結合茲に完成し、此の一大結合に基く偉大なる民族力は展開し來り武力と經濟力とは、列國を凌ぐの勢を示し、一時一大勢力を歐洲及全世界に揮つたのであつたがユーバーアレスと稱する全國民的驕意と外交上の疎漏とに依りて、第一次の世界大戰を惹起し、終に大敗しビスマルクの大業は亡びた。

(12)

英國國民は、其の自主自尊の國民精神、古來頗る堅實にして、内には自治好く行はれ外には外交頗る巧妙を極め、而して海軍及海運の力偉大なりしが爲めに、世界の要地に席を追ふて其の國力は延び來り「日の没する事なき大英帝國」を建設し得た。英國人は異人種に對する同化は行はざるも、其の統馭は巧妙であつた。英國國民の優秀性は、由來列國人の公正に認むる所である。

北米合衆國に至つては、理想家的移民の移住に依りて建てられし一新殖民地なりしも、自由を欲して英國より獨立し、而して歐洲の列國人は、自存自由とを追ふて、此地に來り住し、終に一大國民を爲し、初めに成りし小なるステーツを集めて、一大ネーション即ち北米合衆國をなすに至つた。國內には、白人以外に三千万に達する黑人ありて、民族統一に困難ある如き觀あるも、畢竟一大民族となりて、米國式同化行はるなる可し。移民は日に月に増加し、今や人口は、一億四千萬に達するのである。同一人種のみならず、黑人あり、國有の土民たる赤人あり、各國より來れる白人あり、然かも國は富み兵は強く、偉大なる國を爲して、世界に臨みつゝある、此の異人種の統合せられつゝある事實は、注目す可きである。異人種反目説を證認する一つの事實でもある。

(13)

人種と民族との動きは、大要右の事實の如し、進んで、民族興亡の理數の研究に移

ることとする。

戊 民族興亡の理數

一、一つの國は、必ずしも同一の人種又は同一の種族より成立するものではない。一つの國の中に、異人種あり、異種族があつても、國は堅實に保たれ得るものである。各國の事實が之れを證明する。唯だ大切なる事は、人民の同化にある。即ち人民の精神的和合にある。例へば白耳義にしても、瑞西にしても、同じく數種の國であつて、而して古來國の統一は完全なるが如きである。佛國にしても、英國にしても、米國にしても、各々幾多の異なる種族より成立してゐる而して國は古來大國の威力を備へてゐる。凡そ國として人民の「協和」は大切である。一千二百年前、日本の産める偉人聖德太子の憲法には、其第一條に於て、「和を以

(14)

て尊しとなす」と規定せられてあつた。眞理は古今を通じて同じである。印度には、四億の人口がある。併し乍ら、宗教風俗言語各々異り、古來人の和なし。四億の大衆を有し乍ら、印度國と稱する國家の獨立なきは、其の爲めである。

二、民族は、孤立して存在せず他の民族と接して存在する。人類は孤立す可きものではない。其故に、他の國との應接連絡に細心注意を要する。若し一民族にして其の外交を過らば、其の兵力も又用を爲さない。其資源力も其の多數の人口も用を爲さない、大奈翁は、一大戰畧家であり、古今比儔者なき大人物であつたけれども、其の外交は慎重であり、東の國と戦ふには、西の國と結合したのである。斯くて初めて大勝を收め得た。偉大なる政治家比斯馬は、世界を通じて眞に古今獨歩の大政治家であつたけれども、北方の一小國丁抹と戦ふには、更に南方の大國奧國と同盟した。南方奧國と戦ふには、更に南方の伊太利と同盟したのであつ

(15)

た。佛國に戰を挑み、佛國と戰つて大に勝つや、直ちに埃伊の二大國と同盟して
巧妙に敗餘の佛國に備へたのであつた。國を立つるには、孤立は危険である。英
國も曾て此の孤立を敢てせし事なく、唯だ「光榮ある孤立」と云ふ外交語を使用
したる賢明なる外交家がゐたに過ぎない。往々にして世の論者に此點の見解に不
充分の所がある。此の外交上の道理を尊重するを要する。凡て國の安寧を保つが
爲めには、利害の一致する國との同盟又は協調の國を擇ぶべきである。

三、民族の完成は、其の組成分子たる各人民の完成に依りて成ること勿論である。
人民をし幸福ならしめ、其の利益を充分に擁護し、其の民心をして大に安んせし
め、不法なる専制暴壓等を慎むことが、即ち古來所傳王者の王道である。「苟も
民に利あらば何ぞ聖造に妨はむ」の明詔は治國の要を述べ給へる聖意であり、永
遠不滅の聖徳である、神武天皇の同じくの詔勅には、「民を以て大御寶となす」

とある。仁徳天皇の詔にも「君は民を以て本となす」と宣し給ふ。又一千餘年前
の聖徳太子の憲法にも「大事は宜しく衆と共に論す可し、獨り斷す可らず」とも
ある。又孝徳天皇の勅にも「夫君於天地間逢萬民者不獨制」とある。又明治天皇
が神明に誓はれて下されたる五個條の御誓文の中にも「萬機公論に決す可し」と
宣はせ給ふてある。總べて此等の御聖勅は民福利を尊重し給へる聖業である。

滿洲國建國の宣言の中の「順天安民」とある語も、全じく治國の要諦である。孔
子の教は仁にある。仁とは民を重んじ、民の心を尊び民を恤む事である。古來東
洋の政治理念は民福に在る、獨裁専制と云ふ如きは、古來より東洋人の理想では
決してないと云ひ得る。人類の一般の目的は、人類一元の理より見て、本來同一
のものたる可きものである。従つて人類の集れる民族の統治方法は、何れの國何
れの代に於ても、民を本となし民の幸福を保障するにある。幸福のたる所に、人

民は集り來る即ち樂土である、其所に大なる民族は自からに成り、強き民族は生じ文化の民族は建てられるのである。民族の安榮は斯くして完成す可きである。若も支那古聖人の所謂王道行はれ、人民悦服せば、萬民は其樂土を尊び守り、國民の自存力は、必然に自發的に行はる可きこと勿論である。之れに反し、仁弟正道棄れ、唯だ腕力と強暴とのみを重んじ、人心安んぜざれば、「帶甲百萬あるも用を爲さざること」古へに孟子の直言せる通りである。今のソビエツトロシヤは帝政時代以上の一大軍備を有して居り、ナショナルの主義に轉向し、民心も意外に強健である。獨逸と戰ふて相當の威力あるを示してゐる。凡て萬民の良心からの満足より生ずる萬民の總動員にして、初めて眞に完全なる國防力は生じ得るのである。若し夫れ人民悦服し、不平安全く國內より拭ひ去らるゝに至らば、世に反民なく巷に盜賊なく、國內現實に樂土たる可きである。萬民の樂土たるが爲

(18)

めには、正しき政治は完全に行はれざる可らず。安民は治國の要道である、「王道主義を實行し、必ず境内一切の民族をして、照々皞々として、春臺に登るが如くならしめ、東亞永久の光榮を保ちて、世界政治の模型と爲さむとの滿洲建國の宣言は、確に治國の要諦として、全世界は讚美す可きである。

二 現代民族の共存と對立

甲 民族共存の事實

カイゼル時代の獨逸は、「ユーバー、アレヌ」即ち「凡てに獨逸は超越す」との國民的自負心を鼓吹せる爲めに、驕慢と疎漏とを生じ、大いに軍備成れる其の武力にのみ依頼し、國民を擧げて白耳義及佛國の東北部を併合せんとし、終に土埃勾勃の

(19)

四國を誘ふて、大戦争を開始し、之れが爲めに、英佛露伊米日等の世界の大国を故意に敵に廻し、總力戰當然の歸結として大敗北を爲してフオツシユの軍門に降服し獨逸國民に禍し、世界の人類に對しても五年に亘りて甚大の損害を蒙らしめたのであつた、獨逸自ら犯せる大過也と云はざるを得ない。

グエルサイユ條約に依りて、獨逸及其同盟國は痛く制裁せられ、世界は固く約束して共存の途を立てた。其方法として、一は政治的に、二は社會的に、三は人道的に列國共同して世界の平和を確保する事となつた。「國際聯盟」「勞動會議」及「赤十字聯盟」が其れである。即ち衆智を集めて成れる新機構である。即ち二十年前の「新秩序」であつた。

一 國際聯盟と稱せらるゝ機構は、各民族の聯結であり、國際聯盟は世界の各民族が、條約を以て、世界的の社會又は聯盟を建設したものである。唯單に國の烏合

にあらず。公平の見解を要す。

國際聯盟の目的は、聯盟規約の前文に於て、明白に示されてある。「一、各國は戦争に訴へざる一定の義務を受諾し、二、國際關係を公明にし、三、國際法を尊重し、四、正義を尊び、條約上の義務を重んじ、五、世界の平和安寧を完成せんことを約束したのである」。(條約前文参照)

此約束は、一九一九年以來全世界の列國に依りて、久しく守られ、世界の平和は其れに依りて維持せられた。併し乍ら、大国には、夫々依然として強き軍備ありしを以て、軍備なき聯盟にては、此れの大國の行動を制壓する力を缺いでゐたのである。

其の初め、佛國の提案にては、聯盟に適當の軍備を置く可しと云ふにあつた。併し乍ら、若し此の軍備を置くとせば、各國は、各國の上に、一大權力ある聯盟即

ち一大人格即ち権力主体を有する事となり、各國は、獨立を失ふの憂がありし所より、佛國の提案は、其れが爲めに用ひられなかつた。

其の後に至りて、國際聯盟の盟邦の中から、日本、獨逸、伊太利の三國は順次脱退し、追々と無力となり、終には全く無効たるの形となつた。今は既に形も實も亡じたる也。

二 國際労働會議も、一時の理想たるに止つた、人類の最大部分を占むる世界の労働者は、大戰以前の如くに、マルクスの主張せる所のインターナショナルの思想に偏せずして、反つてナショナル即ち民族尊重の觀念に動くに至つた、思想上の一大變轉である。従つて各國労働者の固き團結は生せず、反つて反目が異民族間に現はれた。ナショナルの時代としては、理として斯くあらざる能はざるものである。

三、赤十字聯盟は、大小六十餘の世界各國の赤十字社が之れに加入して居り、大戰以前と異り平時にも、人道平和の爲めに、赤十字として盡瘁しつゝある。列國赤十字少年間の平和と交通とは、美事に成立しつゝある。其少年男女の數は、千萬人を超へてゐる。之れ大戰前に曾て無かりし現象である。少年民族共存の實現である。

乙 民族對立の現實

一九一九年國際聯盟の成立すると同時に、佛國は、安全保障の條約を英米に要求した。又歐洲の小國を誘ふて、小協商國を歐洲の東部に組織した。之れ獨逸民族に對する他の諸民族の對立である。歐洲に於ては、再び過去大戰前の情勢に立ち戻り、民族の對立が明かに生じたのである。

英佛二國に至りては、數百年に亘る歴史的の反感は漸く去り、二國は政治的に結合を重んずるに至つた、之れに對して、獨と伊との結合が新に生じた。獨は古來佛と到底親しみ難き國柄であり、又伊は過去の如くに、英に親しむの政策を棄て、新に獨と結び、對英方策を講じ、英に對して、地中海に於ける勢力を握らんと焦慮した、野心也。江海を扼するエチオピアの領有を爲せるは、其の目的に出で必然的に此所に至つたのである。

大戰後の露國は佛國と結びて、獨逸を挟み、獨逸の東西侵入を、永遠に禁壓せんとした。露佛兩國としては必然の策である。白耳義は、佛國との對獨同盟的結合を廢棄し、永久中立の主義に復り、主として英國に依頼した、東歐の小國は、各々民族保存の爲めに、或は佛國に親しみ、或は獨逸に阿りつゝあつた。一時は小協商國は佛國の同盟國となつてゐた。歐洲には、高加索民族即ち白人種の國のみが存在する

にあらずして、蒙古民族も、亦國を爲しつゝある。例へば、匈牙利、ブルガリヤ、フィンランドの如きは其れである。然れども歐洲内に於ては、白人と有色人との對立と云ふことは、由來之れなし。白人對有色人の争は、亞細亞及亞米利加大陸に限られてある。必ずしも、「白人と有色人とは坑争するもの」にあらざることは、歐洲の事實に鑑みて明白である。更に又チュートン人種とラテン民族とは、必ずしも對立するものではないのであり、此の理は獨逸と伊太利とはビスマルク時代、クリスピー時代の過去にも結合せし事があり、又現在にも、結合しつゝあるの事實に由りて、明白である。アングロサクソン人とラテン人たる仙人とは大戰以後は舊來の反目を棄て、親睦しつゝあつた、此の二異民族は、必ずしも對立するものではない今日の英國は、未來に於て、佛國と結ぶことを欲しつゝある。民族の對立は、各自民族が其の生存の爲めに、便宜の方法を擇ぶより生ずるのであり、同人種、同民族

たりとの感情のみを以て、婦女子等の増悪するが如くに離合するものでは決してない。國民總體への利害に依りて動く可きものである。異人種たるが故に、必ず反目すとの道理はなく、其の事實も亦ない。日本人は、曾て二十餘年の久しきに亘りて英國と同盟したのである。薩長は英人に依頼したものである、白人對黃人の抗爭を「不可避」と論ずるものは、日本人としては自論自取となるのであり、妥當の見を欠くものと云ふ可きである。凡そ平和と共存とは、人類の目的である。日本人は靜かに利害を考ふること肝要である。

(26)

丙 各民族の物資力の不平均

「人は法律の前に平等也」との思想は佛國の華命以來生じ而して完全に箇人の意識となりつゝある。「國と國とは法律上平等也」との國際法上の法則も、亦今日に於ては各國民に依りて、大いに尊重せられ來つてゐる。此の時に當りて、各國には、人口、面積、資源等に不平等ありて、其所に、不合理を呼ぶの聲が貧乏國に依りて揚りつゝあることも、事實である。

英は全世界に亘りて廣大なる領土を有し、露は、歐亞に跨りて宏大なる地域を領し佛は、英に次ぎ全世界に亘りて、大小の領土を有しつゝある。米も亦北米と太平洋上とに、廣大の領土を有しつゝある。和蘭、西班牙、葡萄牙及白耳義も亦多くの土地を各地に有しつゝある。爾餘の諸國は、此の種の領土を有しない。此等諸大小國の領土は、二百年以來、其祖先の甚大なる努力に依り又文明の力に依りて、其の國民的領土となりしものであり、其國々の子孫としては、之れを守ることが、當然に其の權利であり、又祖先に對する大なる義務である。國際法上より之れを見れば、這は獨立國の有する自衛の權利であり、他國の干與を許す可からざるものである。

(27)

本來國の平等とは、國土の大小廣狹さの事實を云ふにあらずして、法の前に於て、國家は大小國の區別なく、何れも平等の權利ありとの原則を云ふに過ぎない。

白耳義の如きは、前々の國王レオポルド賢明にして、王の私財を以て、亞弗利加の中央部の沃地コンゴと稱する一大領土を探險家スタンレーの智と勇とを利用して密かに買収し、之れを、後日に至り、白耳義國に寄贈せられたるものである。本國に對して、八十倍する大領土である。白耳義國民としては、棄つ可らざる寶物である。

(28)

伊太利は、一八六一年に至り、埃國より獨立せる國であり、其後一九一一年に至り北亞のトリポリを併合し、一九三六年エチオピアを領有したのである。伊太利には鐵も石炭も乏しく、石油もない。併し乍ら、由來久しきに亘りて、時としては、一年四十萬人に達する移民を、歐洲、南米及北米に出し、其れに依りて、國民經濟を

調節し、其れにて満足しつゝあつた國である。其迄は穩かなる國民であつた。

獨逸は、英佛をして、一八七〇年以後即ち獨逸の統一以後に於て、亞弗利加に自由に領土を擴張せしめて、ビスマルクは「英佛二國をして砂土の爭奪に眺らしめよ」と之れを冷笑しつゝ之れを靜かに看過せる國であつた、然るに後には、獨逸自身も亦亞弗利加大陸にも大なる領土を有するに至り、一八八五年のコンゴ河に關する柏林條約に關しては、獨逸は其の主宰國となり、又太平洋にも廣範圍に亘れる、マールシャル、カロリン、マリヤナ等の群島を領有し、支那にも青島を租借地の名を以て領有するに至つたのである。然れども、獨逸國民の自負はいつしか増長して、海陸軍力の完備のみ依頼し、一九一四年の佛白に對する無謀なる武力侵畧となり、終に世界の列國を敵とし、必然に大敗し、其制裁として、鐵の一大資源地たるアルサスローレーヌを失ひ、偉大なる政治家ビスマルクの功業を一朝にして亡ぼし又海外の

(29)

領土は、悉く之れを五大國の爲めに放棄せざるに至り、其れを「國際聯盟の統治委任地」となすことに同意したのである。一九一九年のヴェルサイユ條約が、其れである。此の大失態は獨逸民族自己の過失である。

其他の小國には、植民地あるあり、なきあり、植民地なき民族は、其の國力は弱く常に小國として存在せざるを得ない。然れども、國としては、他に對して、平等の權利を有し、満足しつゝある、不満不平の國は、其中の唯だ若干に過ぎない。

丁 各民族自存の方策

マルクスは、一八四八年以來インターナショナルを叫んだ。人類の最大多數を擁する全世界プロレタリアの生存確保の爲めには、此以外に良法なしと考へたのであつた。此の思想は、一時は一大勢力を全歐洲に揮ひ更に全世界に得た。之れ大戰前迄

の世界的現象であつた。今日は、マルクス式のインターナショナルは、全く消へ失せた。世界の第一次大戰争其者が、本來ナショナル即ち各民族保全主義の表現であり、民族保全の爲めに、四年有半に亘りて大戰は繼續せられたのである。此大戰以來、全世界に亘りてナショナルの思想の勃興は必然である。

ロシアさへナショナルである。ナショナル即ち民族主義の思想は、一九一四年乃至一九一九年の大戰以來列國に強く生じた。大戰直後歐洲に活躍したる伊のファッシズム、佛のアクション、フランセーズ、後のクロア、ド、ゲール、獨のオルゲツシユ、後のナチス等は、何れもナショナルの發現を、確的に證明する事實である。

然るに日本には、世界の氣勢に反對して、世界大戰後一時マルクス式インターナショナルの思想擡頭し、津々浦々に至る迄其の聲が大に揚り、怡も世界の氣勢であるかの如くに、一般の人の口より傳へられたけれども、此の事は、本來が事情の研究

足らざるに因する錯覺である其故に、此の一大流行の主張は數年以來急轉凋落し今日にては國を擧げてナショナルの叫びと變じ、然かも頗る偏狹にして極端にさへ走つたかの觀がある、露國も今日は、強烈なるナショナルの國となつた。インターナショナルは唯だ聲のみである。今の露人は國を擧げて箇人の生命は國の爲めに捧げてゐるのである。ナショナルの思想行はるゝに及んでは、一國內に於て、「階級闘争」を叫びて民族の不統合を唱ふるの矛盾なるを悟る可きは、必然であり、階級闘争に依りて其目的を達せむとする共產主義は從つて棄てられ、唯だ資本主義を是正する穩かなる、社會政策のみが、獨り殘存する事となる可きは、當然である。右の理論は、國民として何人も理解す可きである。正確の意味に於ての資本主義は依然として行はれねばならない、其の資本主義とは、社會主義即ち財産の私有を排斥する主義に對して、箇人の「私有財産を是認する主義」である。決して資本家をして

専横ならしむ可しとの横暴なる主義ではない。此の理論の認識の正確なるを要するナショナルの政策行はるゝ事とならば、各民族の産業の保護は、必然に生じ、關稅の障壁は高められ、産業を指導するに、國家の權力を以てするの密策となり來る。之れ今日日本人の所謂「統制經濟」又は指導經濟である。統制と云ふは日本人の使用する用語であり外國にては指導の文字が使用されてゐる。「指導經濟」と云ふのは、人民の自由を全然奪ふて、統制的に官僚が獨斷的に專權を揮ふと云ふ事ではなく憲法及法律に基き、資本に關する人民の自由を適法に重んじつゝ、人民の産業を國民全体の生存の爲めに、適當に指導するのである。即ち適當なる國家經濟である此の理を誤らざること肝要である。

ナショナル即ち民族主義は、民族の自給自足の要求を必然に伴はしめる。總べての資源を開發し、自國の領土に產出する物資を以て、自國民を養ひ、自國民を守らん

とする。然れども自給自足論者の極端なるものは他國に向つての物資の強要を唱へ更に武力的侵畧をさへ主張するのである。之れが爲めに、反つて秩序を紊り國民の生活を不安定にし、物價を人爲的に高騰せしめる。之れ國民の幸福の爲めに警む可きことである。

ナシヨナル即ち民族主義の思想に基く所の國民自存を主とする政策は、民族の安榮の爲めに行はる可きを原理とする。之れに反する結果を生ずる政策は、ナシヨナルの破壊である人民を困しめることは、ナシヨナルの本則に反すること、理論上明白である。凡そ人民箇人の完成は、即ち民族の興隆である。人民の完成は、人民に唯だ物資の欠乏なからしむることのみに限られてはならない。人民に精神的の満足あらしめ、心海の安慰あらしめなければならぬ。「生活の安定」と世人に稱せらるるものが若しも唯だ單に、「物の供給」であるならば、それは眞に人民の幸福を重ん

ずる政策とはならない。總ての人民をして、憲法又は法律上の保障する自由を確實に享有せしめ秩序を整然たらしめ、文明を尊重し、人民の智育を完全に發達せしめ全人民の總力を以て、自發的に民族の發展するように政治することが、眞の人民生活の安定であり、其れがナシヨナルの尊重である。即ち一部人の專横專制は、ナシヨナルを亡ぼすものであり、唯だ之れを行ふ若干の人々のみをして、満足せしめるのである若も統制のみを重んじ、正しき自由を排斥するならば、全人民をして萎縮せしめ、全國民の力をして消失せしめる。之れ當然の結論である。戒む可きである但し戰時には戰時に適應する憲法法律とがある、此れは勿論正しく發動せしむ可きであり、斯くすることが、民族の安榮を保つ所以である。

三 民族共存の將來

甲 民族間の秩序維持の方策

人類の目的は、平和と進歩とでなくてはならない。孫子曰く、「兵は兇器也」と、何人の考へ方としても戦争は破壊的のものである。唯だ不得止場合に於てのみ、民族自衛の爲めにのみ、戦争は一時の手段として、用ひられ得る。古來東洋の王道は戦争を排斥し、霸道は戦争を好むものとされ、戦争は、野心政治家が、其の箇人の功名を立つるの手段として使用するものと見られてゐる。

二十年前の世界第一次大戦争は、獨逸の爲めには、甚大なる禍であつた。世界各民族の爲めにも、又一大損益であつた。三千万人の尊き人類は、無益に此の侵略戦争

(36)

の犠牲となつたのである。再び斯る不祥事あらしめざるを、人類としての道德とすると云ふのが、一九一九年の世界の考へ方であつた。

若も一民族にして、自國に領土少く、原料乏しとの故を以て、他國の領土の公々然としての獲得を主張するならば、其れは、國內に於ける社會主義式階級闘争に酷示する主張であり、國際間の平和を紊すものであり、終には各國間の闘争となること必然である。蓋し他國にも、各々自衛の権利がありて、其の自衛上よりして、戦はざる可らざるに至るからである。若も各國にして、各國領土の合理的分配を主張して、仮りに之れを實行し得たりとしたならば、一時は、或る不平國は、其の不平を止めるであらう。而して一時的に平和は望まれ得るであらう。併し乍ら、或る國の人口にして、益々増加し、其工業にして、益々進展せば、其の國は、又々領土及資源の不足を訴へ來り、争は新に生ずるであらう。再々の利己的欲望は、列國とし

(37)

て、甘んじて之れを聽き入れ得ざるは明白である。斯くして必然に戦争となるであらう。惟ふに領土の合理的分配の如きは、單純なる理想にして、事實として行ふ可きものではなく、行ひ得ざるが實際であらう。但し資財資源の一國的獨占を慎み、國際協定を以て、物資に關する自由の取引を行はしむる事となすは、可能であらうと思はれる。此の事業は、國際聯盟に於て、實行に移す爲めに、一時研究せられつゝあつた。此の方法は、各民族の生存を救ひ、民族の對立を變じて民族の共存となし、世界の平和を保つ爲めに、合理的の一方法であらうと思はれる。

(38)

此方法は「極端なるナショナル」即ち民族主義の極端なるものを寛和して、國際協調に向はしむる穩健なる一方法である。一九二一年以來、國際聯盟は、此問題に付て研究調査し來り、一九三五年の總會に於て、英國代表は、之れを聯盟に提起し、委員會が開かるゝに至つたのである。當時適當なる解決案が若し成立せば、眞に世界

平和の爲めに幸福であつたが、其の事なくして終り、終に大國は再び生じたのである。

人類の堅實なる生存は、勿論大切であり、各民族の自存は、重大事である。併し乍ら、民族の物質慾のみを満足せしめたからとて、平和の確保は、其れにて完しと云ふ事は出來ない。マルクス式唯物主觀の説のみが、決して眞理ではない。人類をして、平和を樂むの一大理想を、常に人類に向つて鼓吹す可きである。一九一九年以來成立する赤十字聯盟の人道主義の如きは、此意味に於て合理的である。若も佛教信仰國に向つて、基督教を押し賣りせんとするならば基督教は、高遠なる人類愛にありとしても、其結果は、反目抗爭であり、平和の破壊である。又或國が、其の主張する主義を以て、他國に押し賣りせんとするならば、其れは好んで平地に波瀾を起すものであり、平和の破壊となる「ファッショは輸出せず」とムツツリーニ

(39)

の云へるは巧妙の言であつた。赤十字聯盟の人道主義に至つては、萬國共通の博愛である。之れに依りて世界の人道平和は進められ得可く、國際の平和は、此の宣傳に由りて破壊せらるる筈は、斷じてない。「博愛衆に及ばず」事は、我が日本國教育の方針の一であり、日本は、赤十字聯盟と其の主義を同ふして居り、平和主義の國なる一證尤である。尊き證尤である。若も總べての民族にして、絶対に人道を重んじたならば、國際的猜疑は當然に氷解し、自國のみの優越心は、自らに消散し、法律の前のみならず、政治にも、經濟にも、國民即ち民族と民族との平等の理想は行はるゝであらう。人種の平等も、國家の平等も、是に至らば、必然に確實に行はるゝであらう。

(40)

物質的にも又精神的にも、總べての民族をして、満足あらしめたならば、國際平和の保たる可きは、理として當然でなくてはならない。

領土の放棄は民族の名譽及自存の爲より見て望み得可らず。植民地の合理的分配も實行至難である。一時獨逸の放送せる此の殖民地再分配の主張は英、佛、日、蘇、白、蘭、米の承諾する所とならぬであらう。

併し乍ら、人口問題の緩和の爲めに、各國人が、他國に移住する事に付ては、成る可く之れを自由にし、各國共に平等に、各民族の移民を取扱ひ、人類をして、利益幸福を相互に獲得せしめることは、正しき主張と云ふ可きである。其故に、其國の自衛自存を妨げざる範圍に於て、各國家は、人民の移住自由の世界的條約を公明に締結する事も、向後の平和の爲めに、望ましき一方法であらう。民族の自衛は理也。併し乍ら、人種的偏見を以て、白人か有色人を又有色人が白人を、徒らに感情的に排斥するは、人道に反し、平和を紊るものである。但し先年日本人として、漫然として、「人種平等」レイメイイッオウリテイを列國に向つて提案せることも、不注意であつた。蓋し殖

(41)

民地を有する大國は、本國と殖民地とを、全然平等に取扱ふとせば、各大國の國內の平和を害すること明白なるが故である。ヴェルサイユ平和會議に際し、日本は巴里に於て、初めになせる人種平等の出張を改めて、國民平等 (equality of nations) となせしは、而して余が此の事を大いに唱へしは、公正であつたと信ずる。我が日本國民の理想は、「普く人類の福祉に貢献する」に在る。各國に之れあつて、世界の秩序は維持せられ得る。世界の指導者として、此の理想を日本人は一日も棄て、はならない。

(42)

乙 民族防衛の本義

日本國の海軍當局は、「外國を侵略せず、外國より脅威せられざる海軍」を公明に要求しつゝある。

日本國の國防は、外國軍より侵略せられざるを目的とし、従つて戦争防止の爲めの國防である。英米の各海軍十と十に對して、條約上の權利として、永久に日本は六であるならば、日本は國防上常に脅威せられる。其故に、日本は、特に余は當年固く平等を唱へし也。其故に又日本は英米を併せて、敵となすことは、數理上國の存立上危険である。蓋し三國海軍を平等となした所で、英米二國に對して日本が孤立するならば、それ即ち「二十對十」となる、即ちそれは、「十對五」であり、十對六以下となるからである。日本國は、戦争を避くる爲めに外交と併せて國防を完ふす可きであり「侵畧せず、脅威せられざる」を要する。

(43)

露國には、今日は千餘萬の大兵がある。其の中にて八十萬以上は、極東に在る。日本國は適當に之に備へて、脅威せられざるを要する。之れ日滿兩國の安全の爲めである。日本國の空軍は、先づ露國の空軍に脅威せられざる程度まで適當に之れを充

實するを要する。日滿兩國の共同國防は、斯くして完きものとなるのである。

獨逸は第一次大戰直前、軍備を擴張し、八十萬の大兵を有するに至り、之れに對し隣邦佛は人口の足らざる所より、二年兵役を三年兵役に改めて、辛ふじて六十萬となした。種々なる欠点が、佛國の新聞にさへ、公然として當時曝露せられた。

獨逸の恐る可き此の脅威あり、國に一大欠陥あり、即ち突如として、第一次世界戰爭は生じた。米人の唱へし如くに「戰爭準備」(preparedness)の完き國は、戰爭に走るの可能性を有する。即ち其れが、「侵畧の戰爭」であり一九一四年、海陸軍を大いに準備せる獨逸は、此の理に落ちて即ち開戦した、然るに外交拙劣にして、四年有半の戰の後に大敗した。其故に、平和の爲めには、戰爭の過度の準備は、何れの時代に於ても危険である。而して之れに若も外交の拙劣を加ふるならば、益々其國の爲めに、危険である。凡そ國民を守る爲めの軍備は、戰爭防止の爲めの國防

たるを正道とする。此の理は各國共に國民として深く考へざる可らず。

歐米人の間には、日本の事情に通じ得ざるものが多い。其故に、日本の滿洲事件に關しては、之れを以て單純に侵畧と見、日本の存立の爲めの正しき自衛と考へない彼等としては、日本の人口問題の爲めに、滿洲事件は生じ、又更らに、人口増加に伴ふ侵畧は、行はる可しと想像し、無益の議論を交はし、道理らしく述べ立て、論界をにぎはしてゐる。米人タムソン博士の論の如き其一例である。曰く「日本の人口問題解決の爲めに、日本にニューギニヤを與ふ可し」と、一米人の此の突飛なる私議に對して、英と蘭とが、直ちに承諾の意を表する道理はない。斯る議論は空論たるに過ぎない。

君子國民たる日本は、人口増加の事實の爲めに、外國の領土を侵略したる事實なし斯る不法の主張を爲す識者もある筈はない。若も日本人が、年々百萬人増加する事

が、百年に及ぶとしたならば、百年後の日本人は、一億七千萬人の人口となるであらう。此の人口の増加するに對して、或は増加數年毎に、或は十年毎に、日本は増加人口の爲めに、外國の領土を其度に要求するならば、それは全世界への脅威となる事は明かである。此の人口増加に關する解決は、他にある可し、人口増加に伴ふ領土必要の此の議論は、恰も「人口増加に伴ふて、其の増加する人口を養ふの食物も土地もなく、墓地もなきに至る可し」との架空的計算と同じであり、一種机上の空論である。

(46)

文明なる日本は、空論を唱へて、徒らに世界人を脅かすの愚を爲すものにあらず、日本人は斯る愚見に讚する人民でもない。日本は他國を侵略せず。戦争防止を欲して、國防に盡力するのである。此信念は、列國人をして理解せしめねばならない。日本人の理想は、普く人類の福祉に貢献するに在る。日本の未來は、平和であり、

日本をして文明に輝かしむるものでなくてはならない。

日本國民は平和と文化の大勢を指導する大理想を懷くこと肝要である。

丙 天然資源の獨占と分配

人類の生命を唯だ單純に保持するだけならば、食料品さへ適當に配給せらるゝならば、それにて足る。其れにしても、或民族は、必ずしも其領土内に産する食料品のみにては、充分と云ひ得ない。不充分の國の方が、全世界には多數である。日本の如きも内地のみの米穀にては七千萬人の人民の爲めには不足である。英本國の如きは其の本國のみの麥にては僅少の月數にて喰ひ盡すのである。

(47)

工業の進歩に伴ふて各戰民は工業上の原料を必要とする。其原料は其民族の本國の領土より産出するもののみにては多くの國は不充分である。瑞西の如きは、立派な

る工業國であるけれども、石炭も鐵も銅も石油もない。伊太利の如きは、飛行機工業の發達せる國であるけれども石炭が不充分である。獨逸にては石炭は豊富にあるけれども今日は鐵が一時不足してゐた。日本には朝鮮の北部に於て日本の内地に無い鐵、石炭、輕金屬等の原料が相當多くあつて此種の原料に關しての自給自足は今日にては當座的には爲し得るけれども、石油は甚だしく不足して居る。差當り人造石油以外に適當の途なし。

工業原料の豊富なる國は英米露の三大國である。久しき期間に亘りて自給自足を完全に爲し得る國は、列國中僅かに此の三國に止まる。其れにしても英本國の如きは若も海上權力を失へば全く工業原料品に窮するに至り、且つ食料品さへ不足するに至る國である。

自給自足を、此三國以外の國が唱へるのは、無理であり、此の無理を押し通さんと

すれば、人民は無益に高價の金を支拂ふこととなり、人民の生活に、非常なる不利を生ずる。

獨逸の如きは、其の過去の海外の植民地を有してゐても其所より鐵が出るのではなく、石油が湧出するでもない。今日縱令舊植民地の取戻しを爲し得た所で、重工業上の工業原料が充分となるものではない。獨逸は、アルサスローレーヌを失つたのが、本來の一大失敗である。此地は豊富なる鐵の産地であり、實に五十億噸の鐵を包藏するのである。一八七〇年の普佛の戰にて獨逸は佛國に勝ち、ビスマルクの賢明に因り、之れにて重工業に關する重要な工業原料を充分に得たのであつた然るに一九一九年無謀の大戦争を惹起して之れに大敗して、此の重要領土を失つたのである。戦争を爲さずに、佛國の領土内の鐵を平和に巧妙に、獨逸の爲めに利用するの穩當なる政策を取らざりしは、政治としては一大失策であつた。

英米露の三國は、文明の優秀力と數百年以來の甚大なる先祖の努力の結晶として、世界に廣大なる領土を有し、文明に貢献しつゝ豊富なる種々の資源を有してゐる。公正の主張としては此の努力を他國は委まゝに奪ふを得ない。ブルジョア排撃の社會主義と同じように、富國を怨嗟するのも感心しない。日本人としても、斯る事を唱へるは、日本の爲めには不利たるは明である。天然資源の開放は各國としても、各國の爲めにも爲し得るであらう。併し乍ら、資源地域の分配は、行ふ可らざる空論であり、永遠に望み得可らざる事であらう。

(50)

自給自足は、一朝有事の時を考へたならば、國として重要問題たるに相違ない。併し乍ら、英米露以外の國としては、此の自給自足の事は、殆んど不可能なる事である。其故に各國にして若も不可能を可能にせんとして、無理なる政策を施し、人民の幸福を阻害し、人民の生活を脅す事は、人權を重んずるナショナルの政治とは成

らないことも亦明白の理である。

「大國は必然に小國を併す」とは第一次世界大戦前、一時獨逸國の軍人の間に唱へられたる主張である。併し乍ら此主張は實現し得なかつた。其故に白耳義は依然として獨立し、瑞西も、ルクサンブルグも、和蘭も、バルカンの小邦も、何れも皆な獨立を保ちつゝある。向後も同じであらう。ポーランドも亡びないであらう。

天然資源の不足する國が、其民族自衛の爲めに、死か生かを選択して、他國に戦を挑む可しと云ふ説も往々にして唱へられる。併し乍ら、其結果は小弱國の敗北となる可きは理として何人にも容易に首肯せられる。若も大國の自衛的同盟成らば、小國は之れに勝つ力なきことも明白の理である。其故に、問題は、巧妙なる外交に在る即ち智力の問題である。外交を巧妙にし、味方の國々を多數に得て、戦時にも、平時にも、國民生存の安全を保つを、唯一の最善方策とする。凡て國として孤立は危

(51)

險であり、極めて愚なる方策である。焦土説は國に對して不忠である。國際協調を以て、國際社會の生存原理となす可きであり、極端なるナショナルを廢し、民族の「自給自足」に設頭するよりも、世界列國の間に、「有無相通」の公正なる方針を定めて、全人類の福祉増進に努力する事が、確に賢明にして最善の方法であると云へよう。此の事は、今日の文明人の間に、望なしと云ふ道理なし。其故に、此の大勢を醸成することに努力する事が、正しき人類愛である可く、正しき政治家の一大事業であらう。人類の進化と幸福とを念とするの國民は、此の正しき道理を確認し以て世界人類の幸福の爲めに貢献す可きである。

(52)

結 論

人類は素と一元的發生のものであることが、學理的に明確でありとしたならば、世界の全人類は、廣き意味に於ての同胞である。其の同胞の悲惨なる反目鬭争は、果して文明國として容認せらるべきものであらうか、其親和は果して望み無きものであらうか、今の全人類は、此の一大事に付て深き反省を責務とする。

二

英本國にも、其昔しは同一島内生息人間の反目抗争は永く行はれた。獨逸民族間にも久しきに亘りて四分五裂はあつた又ロシア人は數十の民族を統一し、同一の國語を使用して、一大帝國を爲し、其帝國亡びて後には、ボルシユビークの大國を作り、一千餘萬の兵力は、ソビエツトロシアの爲めに其の身命を捧げて戦ひつゝある

(53)

人類の反目抗争は、變して親和統合となり行くことは、今日の世界の各地に其事實を示してゐるのである。

三

八千餘萬のゲルマン民族にして、固く統合したならば、恐るべき大國となり、又大文化の國となるの現實は、今日の英米人をして、世界に跨り固く統合せしめ、又共存共榮を盟ばしゐるに至つたのである。今やスラーヴ人も亦全スラーヴの結盟を企てつゝある。ラテン民族に至りては、佛伊反目し、西葡の二民族も佛伊と離れつゝあるの舊態を依持し、其れが爲めに、獨逸民族に對して無力である。或は遠からざる内に、其の不利を悟るの時も來ることあるやも圖られまい。今日の世界の實情は、一方に民族の鬭争激甚を極めつゝ、他方には同一又は同類似民族の共存を保つ萬策が行はれつゝあることは、世界周知である。即ち之れ鬭争より共存に變化し行

くの實情を我々に示すのである。

四

日本と支那とは、往者の歴史は之れを除き、四十餘年以前に一大戦を交へたのであつた。其れに乗じて歐米の諸國は、支那の各地に權域を占め、支那に喰ひ入りしことは、顯著の事實である。支那の近攻遠交の外交策とは、即ち其れであつた。併し乍ら、舊支那國は今や四分し、滿洲は獨立して、日本の不可分の國となつた。外蒙も獨立した、蔣政府は戦に敗れて遠く奥地に逃れ、國民政府は新に南京に建てられ日本と共存共榮を約しつゝある。即ち日本人の舊き反目の時代は共存の新時代に移つたのである。今日に於ては、安南東京、ラオス、及カンボヂヤの諸國も、亦日本と共存の國となりつゝある。泰國も同じ勢に在る。今の日本は、外に敵國なるものを有してゐないのである。交戦しつゝある外國と云ふものを有してゐないのを事實

とする。敵性云には、唯だ新聞紙上の流行文句たるに止まり、法律上敵國なき也。外交機關は存續して居り、國家的に斷行と云ふが如き事態は全くないのである。慶賀す可きである。

五

今日の日本には、東亞共榮圏と呼ぶる、政策上の文字あり、又其事實がある。共榮圏は、既に成りつゝある。之れを完成せしむることが肝要であり、其の完成あるならば、少くも東亞の諸民族は茲に自存し、東亞に平和と先明とは輝き來り、數億の人類は、曾て無かりし幸福を享有し、文化を樂しみ得るのである。全世界人は、日本人の此の大理想の完成を近き將來に仰ぎ見て、全世界の人類も亦、同じ境遇に立つ可きを悟ることであらう。斯くして人類共存の目的は到達せらるゝに致るべきを余は切に人類の爲めに希ふものである。

弊社既刊圖書

田中荒村著	銀行國營論の再吟味	實費	金五拾錢
蜷川法學博士著	東西時局靜觀	實費	金五拾錢
窪田角一著	事變と信用組合	實費	金五拾錢
田中荒村著	銀行事務の機械化	實費	金參拾錢
第二回座談會速記録	時局と銀行問題	定價	金五拾錢
金融問題研究會編	戰時下の銀行體制	定價	金壹圓
第一卷關東編	獨ソ戰は長びくか	定價	金參拾錢
東日ロシヤ課長	馬場秀夫氏講演	定價	金貳拾錢
津久井龍雄氏	國內體制と政治力	定價	金貳拾錢

昭和十六年十二月十五日印刷
昭和十六年十二月二十日發行

(民族の闘争と共存)

定價 金貳拾五錢

(不許複製)

著者 蜷川新

東京市中野區神田町二四番地

發行所 鈴木清太郎

東京市中野區本町通四丁目一三

印刷所 活文社

東京市中野區神田町二四番地

發行所 經濟書籍合資會社

東京市中野區本町通四丁目一三

日本出版文化協會

東京市中野區神田町二四番地

會員番號一〇九五一一番

東京市神田區淡路町二丁目九番地

配給元 日本出版配給株式會社

東京市日本橋區室町參丁目壹番地一、二

株式會社 安田貯蓄銀行

頭取 安田善五郎

電話日本橋(24)
五五五五
一一一一
九九九
九三三
四一五
一一九
九六五

本店 川越市
東京支店 東京市日本橋區小舟町

株式會社 第八十五銀行

頭取 山崎嘉七

本店 水戸市南町
東京支店 日本橋區富澤町

株式會社 常陽銀行

取締役頭取 龜山甚
常務取締役 佐藤五郎
同 三宅亮一

本店 千葉縣東金町

千葉共榮無盡株式會社

社長 大三川弘之

本店 八王子市

株式會社 第三十六銀行

取締役頭取 安田新
常務取締役 渡邊實
支取配人 佐藤忠次

本店 靜岡市

株式會社 靜岡三十五銀行

取締役會長 野崎彦左衛門
取締役 中村圓一
專務取締役 松村嘉太郎
常務取締役 酒井卿重
常務取締役 中津川藤四郎

本店 浦和市

東京支店 東京市麴町區丸ノ内

株式會社 武洲銀行

頭取 永田甚之助

大阪市東區今橋三丁目

株式會社

三和銀行

頭取 中根 貞彦

東京市麴町區有樂町一丁目九番地

株式會社

第一貯蓄銀行

取締約頭取 本間 好茂
相談役 矢野 恒太

社 千葉縣佐原町

國民共濟無盡株式會社

社長 遠山 七郎

大阪市東區備後町二丁目

株式會社

野村銀行

取締役頭取 野村 元五郎
專務取締役 松島 準吉
常務取締役 今井 豐吉
同 武井 信吉
同 熊本 石造

東京市中野區本町通三ノ一四

株式會社

東京中野銀行

取締役頭取 下田 彦人
常務取締役 横田 宗策
常務取締役 布施 公平

川越市

川越貯蓄銀行

取締役頭取 山崎 嘉七郎
常務取締役 德田 繁松
常務取締役 早水 藤四郎

423
44

終

